

隨泉寺寺報

平成18年(2006年) 3月号 第427号

☎ 082-892-0217 <http://www.ttec.co.jp/~zuisenji/>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

春季彼岸会 法座

講師 教得寺住職 加藤 則行師

講題 「ニグルモノヲ オワエトルナリ」

『あひにあひて 物おもふ春は かひもなし 花も霞も 目にし立たねば』
(玉葉 2299) - 小式部内侍 なくなりて後 よみ侍りける - 和泉式部
【通釈】巡り来た春に逢うには逢ったが、物思いに沈む身にはその甲斐もない。

花も霞も目にはっきりとは見えないので。

和泉式部がわが娘(小式部内侍)が亡くなった後読んだものです。冷たい冬がすみ、春が来るには来たが、亡くなった娘の事をあれこれと思う私にとって、何の意味もないし、嬉しくもない。桜の花も眼に入らないし、霞もうつろである。

南のほうから、花のたよりもちらほらと聞える季節になりました。これから一雨ごとに暖かくなってきますが、大事な人をなくされた人にとっては、きれいな花が咲いても、霞も眼に入らない事でしょう。三寒四温とありますが、いつまでも寒い日ばかりではありません。温かい日と寒い日くりかえし、やがていつの間にか春がやってきます。大切な人をなくされた人は忘れることはできませんが、いつの間にか少し、心に暖かい日がくる事を期待しましょう。



3月の法座予定

- 3月11日.....仏婦 新旧役員会
- 3月12日.....掃除 長者原西
- 3月14日 昼席午後1時より.....春季彼岸会法座
- 3月14日 夜席午後7時半より.....出張法座 長者原西集会所
- 3月15日 朝席午前10時より.....春季彼岸会法座
- 3月15日 昼席午後1時より.....春季彼岸会法座
- 4月 3日 午後4時より.....本部役員会・花見

☆映画「阿弥陀堂だより」を見ました。

前々から見たいと思っていた、「阿弥陀堂だより」という映画を見ました。題名が気になって、どんな内容なんだろうとワクワクしていました。寺尾聡、樋口可南子主演のこの映画は「忘れていた、人生の宝物に出逢いました」をサブタイトルとして、お梅ばあさんのいる村の、巡る季節と、美しい自然が、二人の傷ついた心をやさしく包込むようすを、北信濃の四季の景色の中でゆったりと描いています。自然の中にいるだけで、いやされていく人の心、お梅ばあさんの生き方が、人生観をみつめなおすヒントに・・・。

医師として大学病院で働いていた美智子は、ある時パニック障害という心の病にかかってしまう。東京での生活に疲れた夫婦は、夫の孝夫の実家のある長野県に戻ってきたところから映画は始まる。二人は大自然の中で暮し始め、様々な悩みを抱えた人々とのふれあいによって、徐々に自分自身を、そして生きる喜びを取り戻していく。いつのまにか遠くを見ることを、忘れてしまった我々に、“生きている”ことをもう一度考えるきっかけをつくってくれるような気がします。

露天風呂にのんびりつかりながら、妻が言う「いい湯だわ、遠くをみることなんていつか忘れていた・・・」と。一方、阿弥陀堂に住む、96歳になるお梅おばちゃんの「阿弥陀堂便り」という、村の広報誌に寄せるコラムも味わい深い。「目先の事にとらわれるなど世間では言われていますが、春になれば茄子、ネギ、胡瓜など、次から次へと苗を植え水をやり、そういうふう目先のことばかり考えていたら、知らぬ間に96歳になっていました。目先しか見なかったから、よそ見して心配事を増やさなかった事がよかったのでしょうか」と。全てを受け入れてくれる所では、「遠くを見ること」と「目先しか見ないこと」は、決して矛盾せず共存できるところなのだろう。村の人々が人の厚意に示す「有り難いことです」ということばは、現代社会の中では、とても新鮮に心に響く。「有り難い」とは、元々「(人として生まれることは)あり得ない難しいこと」という仏教用語である。自然との共存、人間との共栄の原点は敬いの心であり、「有り難さ」の認識である。地味だが、じんわりと豊かな自然と人の心に触れられる、いい映画だった。



☆御礼

永代経懇志	金	参拾萬円	黒川 裏彦殿	故	黒川 みつ様	特別永代経志として
永代経懇志	金	拾萬円	天野 賢治殿	故	天野 静夫様	特別永代経志として
永代経懇志	金	拾萬円	和田 省吾殿	故	和田 敏子様	特別永代経志として

☆御礼

特別懇志 金 参拾万円 黒川 裏彦殿

☆御礼

門信徒会へ	金	一封	黒川 裏彦殿	故	黒川 みつ様	香典返しとして
	金	一封	天野 賢治殿	故	天野 静夫様	香典返しとして
	金	一封	和田 省吾殿	故	和田 敏子様	香典返しとして

3月のカレンダー 東井 義雄 白木蓮が咲いた その鮮烈な白 いよいよ汚れてしまっている私

神戸のある学校のPTAの講演で、私が、お父さんは子どもにお母さんの存在の輝きを、お母さんは、お父さんの輝きを子どもに届ける工夫をしていただきたいという願いを訴えたことがありました。講演会が終わって会場を出、控室に帰ろうとしたとき、追っかけて来られたお母さんがありました。「先生は、残酷なことをおっしゃる。私の家には、子どもに届けてやるお父さんがいないのです。亡くしてしまったのです」と抗議を受けました。私は、このお母さんを悲しませたことをおわびするとともに、亮太君という男の子の作文を聞いていただき、「どうかお父さんを生かしてあげてください」と、お願いしました。

小四 小西亮太

ぼくのお父さんは、ぼくの小さい時に死にました。それでも「とうちゃんは、どこかでぼくのすることを見とるんや」と、かあちゃんはいいます。

かあちゃんは、いつも働いているので、家へ帰るのがおそくなります。とうちゃんのぶんも働くからです。ぼくが、夕方、戸口のところでまっていると、帰ってきて、頭をなでてくれます。ぼくはうれしくなって「とうちゃんのぶんもなでて」といいます。すると、かあちゃんは「よし、よし」といってなでてくれます。

この間のばん、ぼくがしゅくだいをやっていると、かあちゃんが「亮太は勉強がすきになったで、ええな」といいました。「ちがう、きらいや」というと、「勉強のきらいなもんはえらい人になれせん」と、かあちゃんがいきました。「へえ、そんなら、おらの組では、健ちゃんがいちばんえらいもんになるんかよ。なら、おら、えらいもんなんか、なりたかねえ」と口答えをしました。

健ちゃんは、勉強はできるかもしれないが、いぼるから、ぼくはきらいです。すると、かあちゃんが、ブスツとしてしまいました。

ぼくはだまっていたんですが、かあちゃんがものをいわないので、だんだん、つらくなりました。ぼくは、かあちゃんのところへ行って「かあちゃん、たたいて」と、頭をだしました。すると、かあちゃんは「もうええから、勉強しな」といいました。「そんなら、とうちゃんのぶん、たたいて」といいました。そしたら「よし」といって、かあちゃんは、わらいながら、ぼくの頭を、一つ、コツンとたたきました。ぼくは、うれしくなって、また勉強をやりました。ぼくは、かあちゃんが大好きです。

亮太君の中に、お母さんは、みごとに、お父さんを生かしていらっしやいます。



無常の命を教えて

福永 福治 平成17年

9月28日 直彦44歳 昼食のテーブルに腰を下ろすと同時に床に倒れこみました。あわてて救急車をたのみました。車中で人工呼吸や、電気治療など、休みなく続く手厚い看護もとどかず、急性心不全にて亡くなりました。この世は電光朝露の如し、四十九日法要のお経『仏様の私を呼んでくださるみ声。まかせよ、必ず救う。』を聴聞いたし、いつとも分らない無常の命を教えてくださいました。

法名 釋直道 の由来について

『意識』【顕浄土真実教行証文類】p 132 (抜粋)

《釈尊が説かれたすべての教えの中で、この浄土の教えに及ぶものはない。煩惱に汚れた世界を捨てて清らかな悟りの世界を願いながら、行に迷い、信に惑い、心が暗く、知るところが少なく、罪が重く、さわりが多いものは、とりわけ釈尊のお勧めを仰ぎ、必ず、この最も勝れた、まことの道に帰して【必帰最勝直道】ひとえに、この行につかえ、ただこの信を尊ぶがよいああ、この大なる本願は、いくたび生を重ねても遇えるものではなく、まことの信心はどれだけときを経ても得ることはできない》(親鸞聖人 撰述)

この「証文類」の中より法名をつけたことをご院家さまより聞きました。本当にありがたい事でありました。私達はいつ死ぬとも分らない無常の命を生きています。思い起こせば、食事の時、【いただきます。ごちそうでさまでした。】と合掌は忘れませんでした。【どうぞ お念仏をよろこぶ身になってくれ】と故人が私達に《働き》を始めていること、再会できる浄土があることに思いをはせるご縁としたいものであります。皆さん、本当にありがとうございました。



平成17年9月28日往生 法名 釋直道 俗名 福永 直彦 行年44歳

こころ 金子 みすず

おかあさまは おとなで大きいけれど
お母様の おこころは小さい

だってお母様はいいました 小さい私でいっぱいだって

私は子供で 小さいけれど 小さい心の 私は大きい
だって大きいお母様で まだいっぱいにならないで
いろんなことを思うから